

日本地図作成と水路測量調査の歴史

——ロシア国立海軍文書館所蔵史料より——

ウラジミール・ソボレフ

※【かっこ】内は訳注

海軍文書館史料の研究は、ロシア人海員による日本の測量図、日本の自然環境、日本人の記述の試みの現在分かる初期のものが、一七三九年夏に着手されたことを物語っている。B・ヴァリトン【ウォールトン】英人】大尉指揮下の一本帆船聖ガヴリール号【第一次ペーリング探検時に建造され、この時修復されたもの。長さ約八十フィート】と三本帆船ポリシエツク号【白樺製長さ五十フィート、幅十一フィート、深さ四・五フィート十八權】の日本沿岸航海時のことである。⁽¹⁾

当時は、シユパンベルグ中佐ブリカンチン船アルハンゲル・ミハイル号【一本マストのカッター船、長さ六十フィート、幅十八フィート、深さ七・五フィート】の日本航海もまた組織されていた。⁽²⁾

船舶史料にみられるこれら最初の日本訪問時には、海岸線の簡単な作図、住民の一種民族学的情報、生業等の特徴の報告がなされた。これらは、疑いもなく、ロシアの隣国に関する未だ乏しい皮相な資料でしかなかった。

海軍文書館に所蔵される十八世紀後半の地図類研究により分かることは、当時のロシアでは日本についてはまさに漠然とした理解しかなかったことである。

それ故、海軍省でB・クラシリニコフ陸軍大尉により一七六八年編纂された『北東アジア』地図に掲載されたのは、日本列島のほんの一部分で、その上日本に対する情報は限られたものであった。⁽³⁾

我々の注目は一七七九年海軍省で製作されたメルカトル図法地図『ロシアのアジア部』に向けられる。⁽⁴⁾ (画像02)

同史料の分析により判明することは、ロシア海軍省はこの時期までに日本に関してまだ極めてわずかな情報しか持っていなかったことである。地図には、日本列島全部で五つの地点が記されているのみであり、概ね以下のようなものである。

1. 江戸…王の居住地
2. 長崎…オランダ人は当地と江戸間を海路・陸路往復する。
3. チカブ近くのヤマチソト県は銀を最も産する。
4. 働きたくない幼い子供たちが追放される島。そこでは彼らは無理やりに働かせられる。
5. ヴチランド…オランダ人の最初の居住地。

この地図にはまだほんの少しではあるがクリール諸島の特徴が記されている。

海軍文書館には十八世紀後半の西欧の日本地図文献も所蔵されている。

例えば英国海軍省一七九五年作成の石版地図「日本の南西海岸」である。⁽⁵⁾
(画像03)

ロシアの航海家の初期の学術的日本水路測量調査の試みは、一八〇四年まで遡らなくてはならない。この年の夏、I. F. クルーゼンシュテルン大尉指揮下の探検船ナヂェジダ号はロシア使節とともにペテロパブロフスク港から日本に向った。六ヶ月の日本滞在はナヂェジダ号士官により真剣な水路測量調査のために使われた。

既にカムチャツカから日本沿岸への航海時に、以下の一連の項目に関して組織的な水路測量調査が行われた。

1. 一日平均の緯度と経度
2. 羅針盤の偏角
3. 潮流力
4. 寒暖計と気圧計の目盛
5. 風向

得られたデータを基にして別表が⁽⁶⁾つくられた。(画像04)

日本到着後、ロシアの海員は組織的に天文学、気象学その他の観測を続けた。かくして、初期の長崎港とそこへの接近の【入港するための】航海水路測量図が作製された。⁽⁷⁾長崎港の水域では千二十八回の経度算定がなされ、磁極偏差が確定され、港の実用時【現地時間?】が算出された。

往路、クルーゼンシュテルンとその同僚達は日本北西岸、忍耐岬からアニワ湾までのサハリン東岸、およびクリール諸島の一部を測量した。

観測結果の一部は『ナヂェジダ号航海日誌』に記載された。⁽⁸⁾(画像05)

少し後の一八一三年、サンクト・ペテルブルグ海軍印刷所から、一二三枚もからなる大型版の地図「クルーゼンシュテルン大佐の世界周航付属アトラス」が印刷された。⁽⁹⁾とりわけ『アトラス』中には長崎湾図が記

載されている。(画像06)

我々の視点から見て、大変興味深いのは、クルーゼンシュテルン航海時の調査の結果作成された日本地図である。(画像07) 特筆すべきことは、この地図の正確さと情報量の多さが十八世紀後半の多くの地図に比べて格段に優れていることである。

よく知られていることだが、クルーゼンシュテルンはアムール河口とタタール海峡へ続く水路を発見することができなかった。このため、彼はサハリンは半島であるという誤った結論に達してしまった。従って、『アトラス』には、他のものと並んで「サハリン半島地図」が載せられている。それ以前の上記の十八世紀の地図にはサハリンは島として示されたにもかかわらずである。クルーゼンシュテルンの『アトラス』には、一連の日本風景の挿図も載り、民族学的人物画スケッチも加えられ出版された。(画像08)

サハリンと大陸間の海峡が発見されたのは、ようやく、ネヴェリスコイ指揮下の輸送船バイカル号の航海時である一八四九年であることを指摘しなくてはならない。アムール地域の探検は沿海州とサハリンの地図に大幅な変革をもたらした。

一八六〇年代の初め、軍事拠点ウラジオストックが形成された。すなわちウラジミール湾、オリガ湾、ポシエツト湾といった南部の港湾施設が開かれ、独立した太平洋艦隊が初めて創設された。これに関連して、水路測量調査の中心は沿海州南部に移った。

水路測量調査の指揮官には、V. M. バーブキン中佐が任命された。作業は日本海沿岸の測量図を作成することに始まった。この年代の測量作業は、コルベット艦ノヴィク号、クリッパー艦ラズボイニク号、蒸気汽艇カレワラ号により行われた。バーブキンの探検活動をもとに、一八六五年、ペテルブルグの水路局で、二十二の天体観測地点にもとづき、重

要な全入り江の書き込まれた測量図附、ピョートル大帝湾のメルカトール図法地図が出版された。

一八六一年にI. F. リハチョフ少将艦隊艦船により測量がなされ、スケッチが作られ、日本沿岸図が作製されたことも注目し得る（その中には対馬諸島も含まれている）。

この地域の水路測量調査の発達に対し大きな貢献をしたのは、ロシア海軍士官K. S. スタリツキーにより、一八六五年から一八七〇年にわたりになされた調査結果である。これらの年の間に、彼はさまざまな艦船で航行し、多数の天文観測と磁気測量を行った。三十七箇所の天文観測地点を決め、二十地点では地磁気偏角、十六地点では地磁気偏差を修正した。これら全ては既存の地図の訂正に役立ち、その後の水路測量調査事業の基礎となった。調査者は、ペーリング海沿岸、オホーツク海沿岸、日本海沿岸相互間の測量、それらと日本の主要地点、例えば箱館、長崎、その他との測量の結果の照合に成功した。一八六六年、スタリツキーは、クロノメーターにより、オホーツク海の港ギジガ、オホーツク、ニコラエフスクとウラジオストク、箱館、長崎の連結を行った。

後の一八九四年、スタリツキーの調査結果の一部は、海軍省水路局発行の『水路学論考』として出版された。⁽¹⁰⁾（画像09）

一八七一年から一八七四年、これらの作業はL. P. エラーギン大尉の指揮により続行された。調査はスクーナー艦ヴォストーク号、蒸気船アメリカ号、コルベット艦ボガテリリ号で行われた。この間、エラーギンは二十三地点で位置を確定することに成功した。それら等の地点の主なものは、横浜、長崎、ウラジオストク、【ピョートル】皇帝湾、聖ウラジミール湾等である。これらの調査結果は同様に一部分、『水路学論考』中の別表として刊行とされた。⁽¹¹⁾（画像10）

後の一八七四年から一八七七年、日本海での水路測量調査作業は、

M. N. オナツエヴツチ大尉の指揮下に継続された。一八七八年サンクト・ペテルブルグでは、『東海水路測量調査派遣時オナツエヴツチ大尉により行われた測定集（一八七四—一八七七）』が出版された。一五頁からなるこの書物は海軍省印刷所から印刷された。同書には、ロシアの海軍艦の航海日誌から引用された大量の実資料が、表、地図、平面配置図、スケッチの形で載せられている。⁽¹²⁾（画像11）

一八八〇年代から一八九〇年代、水路測量調査作業は、ピョートル大帝湾、タタール海峡、アムール・リマン【潟】で行われた。同様に一八七七から一八八八年日本海をコルベット艦ヴィチャス号が航行した。S. O. マカローフ指揮下の艦船士官はピョートル大帝湾の沖合部分を測量し、トロイツァ入り江、ガモフ入り江の海図を作成し、水路測量調査、気象観測を行った。

一八九五年、マカローフ少将は装甲艦皇帝ニコライ一世号で、バヴォロートニー岬・聖ウラジミール湾間の日本海沿岸の測量を行った。

一八九八年、ロシアは自国の太平洋における主要海軍基地建設のため、遼東半島南部旅順を期間二十五年計画で租借した。これと関連して、水路測量調査の主要事業は南部、つまり黄海へと移行し、そこで五年間、朝鮮湾、遼東湾の一部の海図を作成した。

日露戦争の初期からは、全ての水路測量調査事業は停止され、事業従事者は航路から魚雷を撤去するため戦艦に乗り組んだ。

終わりに結論として申し上げることができることは、海軍文書館には日本水路測量調査、日本地図作成に関する大量の興味深い資料群が所蔵されているということである。これら文書史料の研究調査と学術目的への使用に向ける事業を続行することは、まさに適切で、時宜にかなったことなのである。

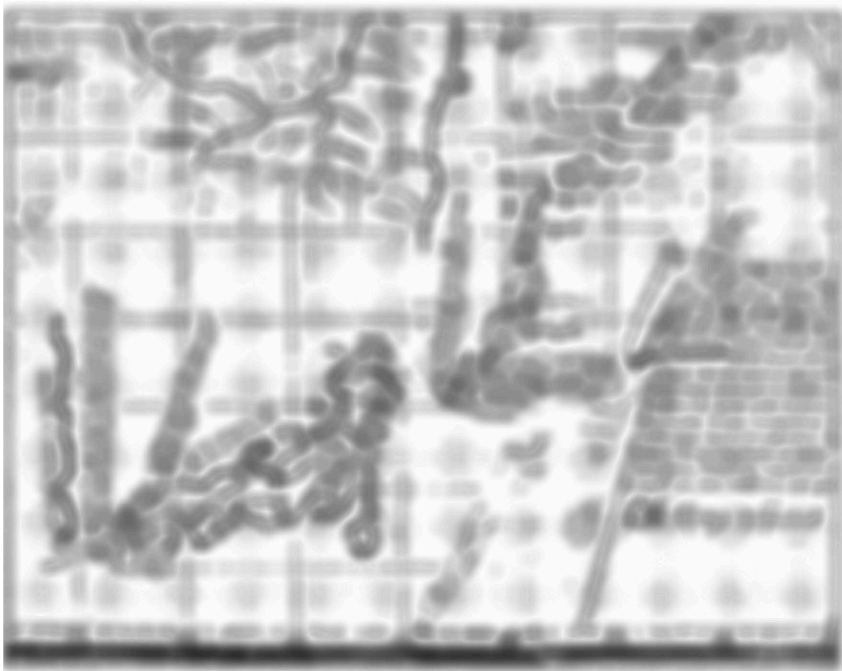
（翻訳：有泉和子）

[註]

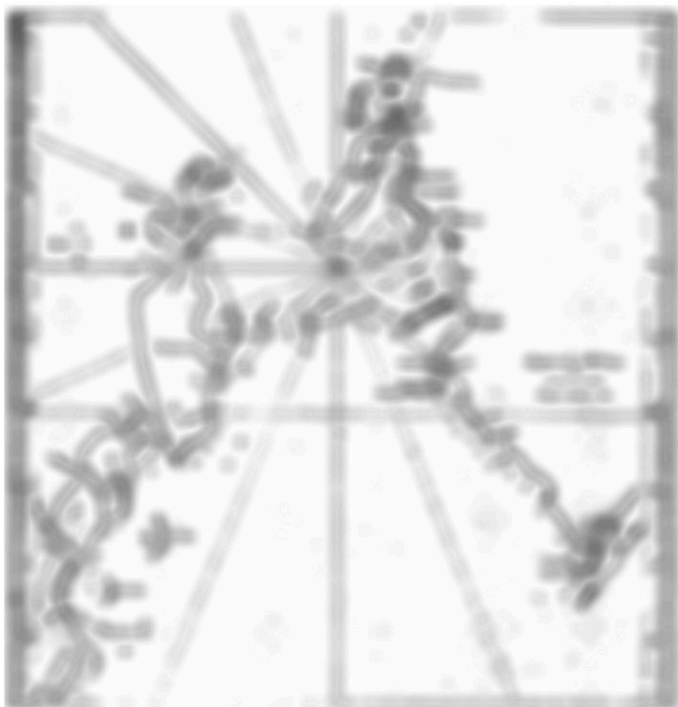
- (1) Российский государственный архив Военно-Морского Флота (далее РГАВМФ). Ф.913. Оп.1. Д.38. Л.172-210.
- (2) РГАВМФ. Там же. Д.36. Л.1-56.
- (3) Там же. Ф.1331. Оп.4. Д.93.
- (4) Там же. Д.106.
- (5) Там же. Оп.3. Д.49.
- (6) Там же. Ф.14. Оп.1. Д.29. Л.121-122.
- (7) Там же. Д.32.
- (8) Там же. Д.534.
- (9) Там же. Ф.1331. Оп.4. Д.709.
- (10) Старицкий К. С. Астрономические пункты, определенные в 1866-70 гг. по берегам Приморской области и на Японских островах// Записки по гидрографии, вып. XV, СПб., 1894, сс.77-91.
- (11) Результаты астрономического определения широт и долгот некоторых пунктов Японского моря по наблюдениям лейтенанта Елагина с 1871-1874 г.// Записки по гидрографии, вып.3, СПб., 1891, сс.19-45.
- (12) Собрание наблюдений произведенных во время гидрографической командировки в Восточный океан 1874-1877 гг. лейтенанта Онецива, СПб., 1878.



画像01



画像02



画像03

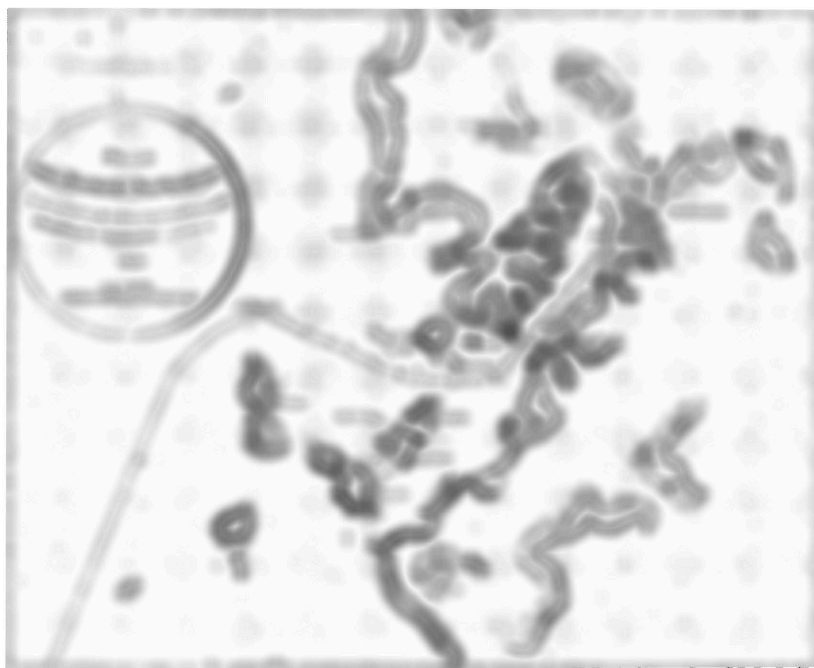
A historical document or map showing a grid of data, possibly a table of routes or measurements. The document is oriented vertically and contains several columns and rows of text. The text is arranged in a structured format, with columns and rows separated by lines. The document is enclosed in a rectangular border.

画像04

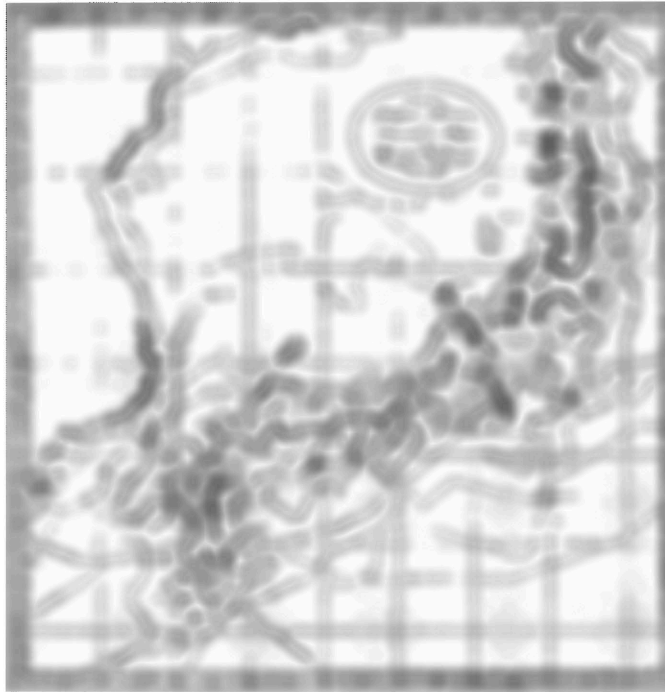
「カムチャツカから日本へ 1804年」



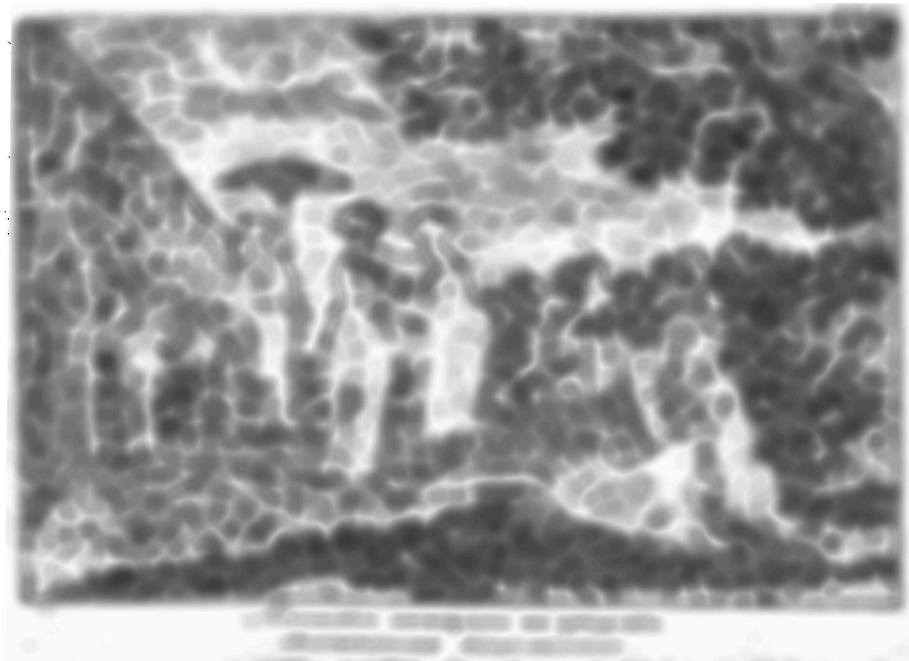
画像05
「ナヂェジダ号航海 長崎から日本へ」



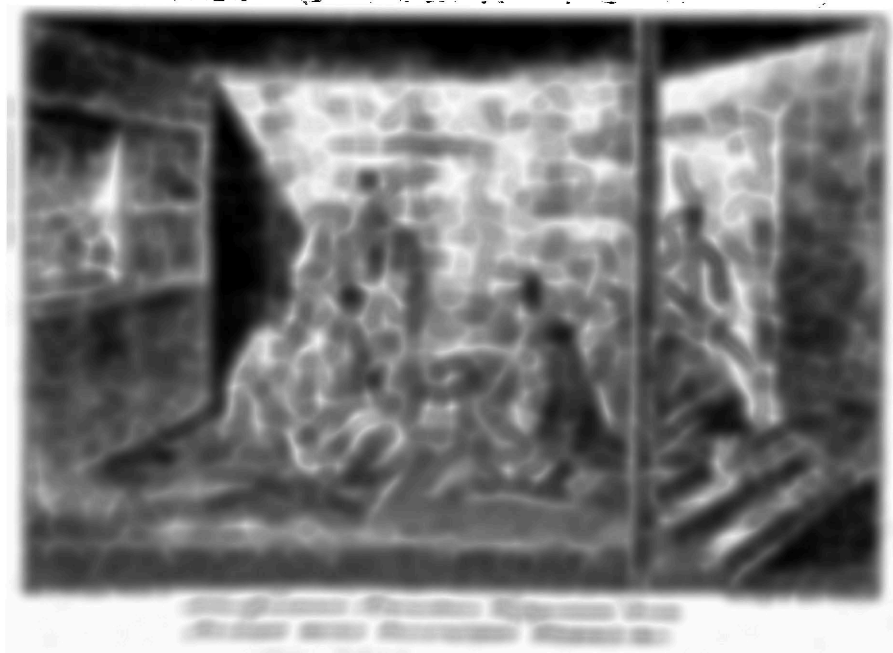
画像06
「長崎湾図」



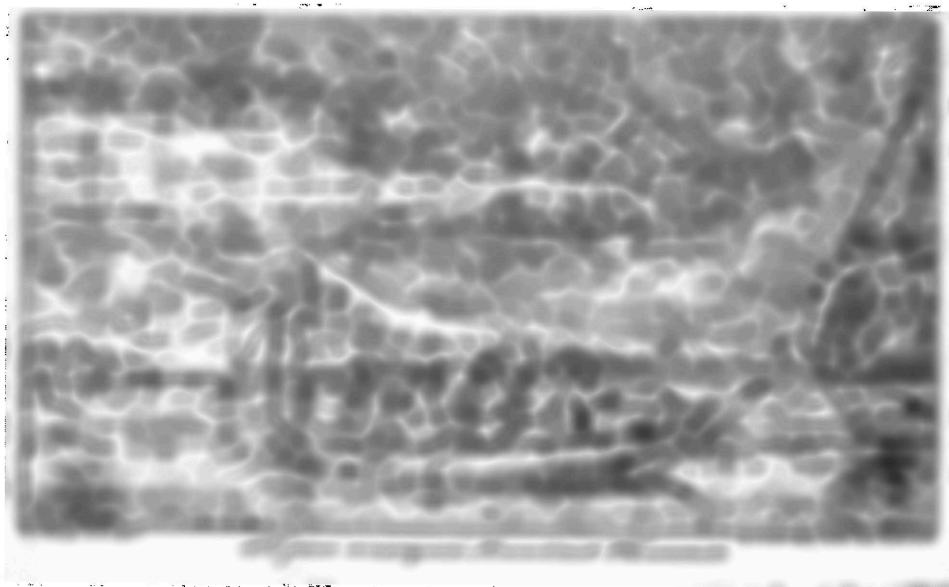
画像07
「日本島および日本海図」



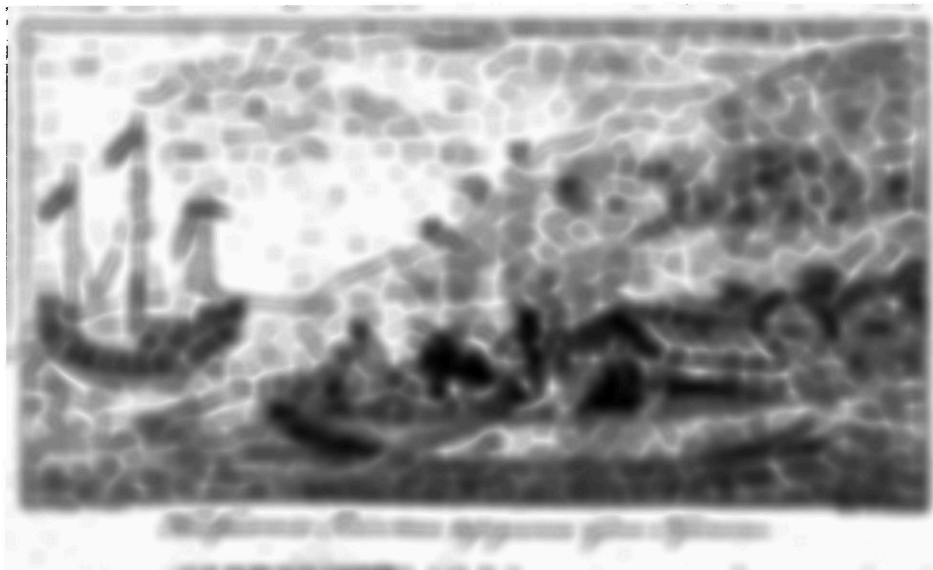
画像08 a
「散策中の日本女性たち」



画像08 b
「日本の監視小屋」



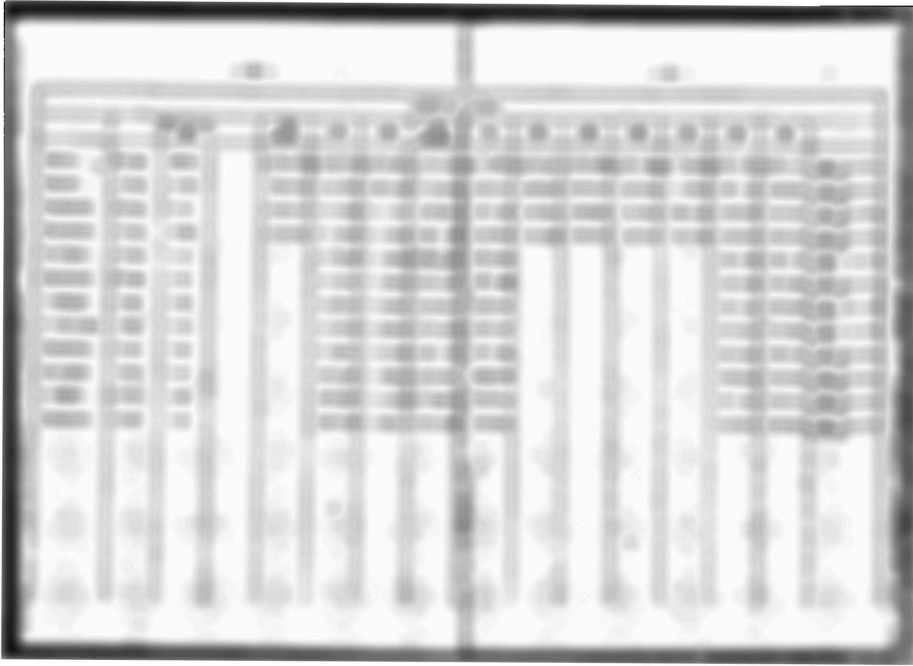
画像08 c
「日本通詞たちの最初の来訪」



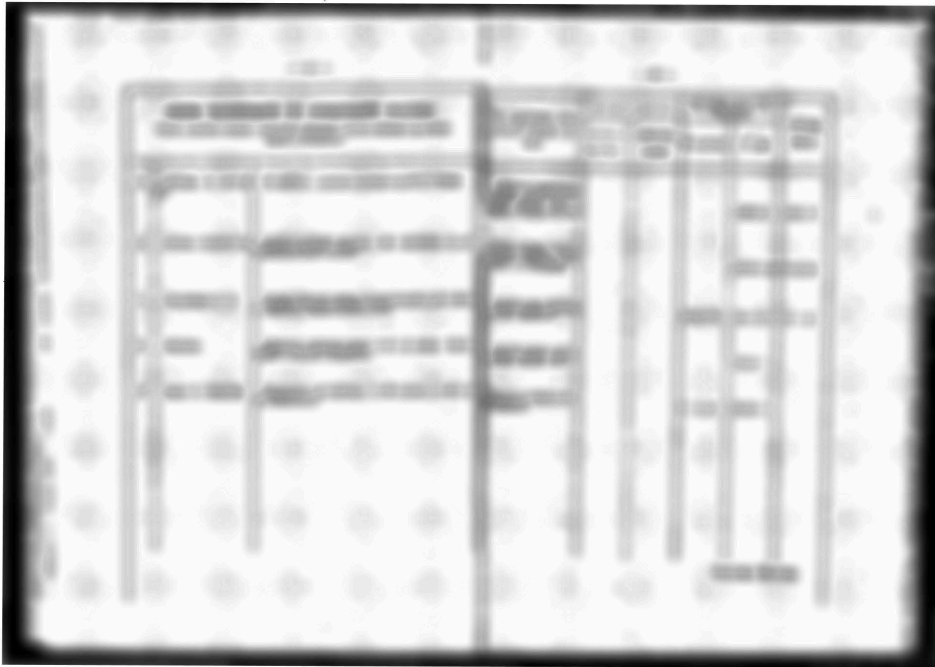
画像08 d
「日本の監視船と要塞」



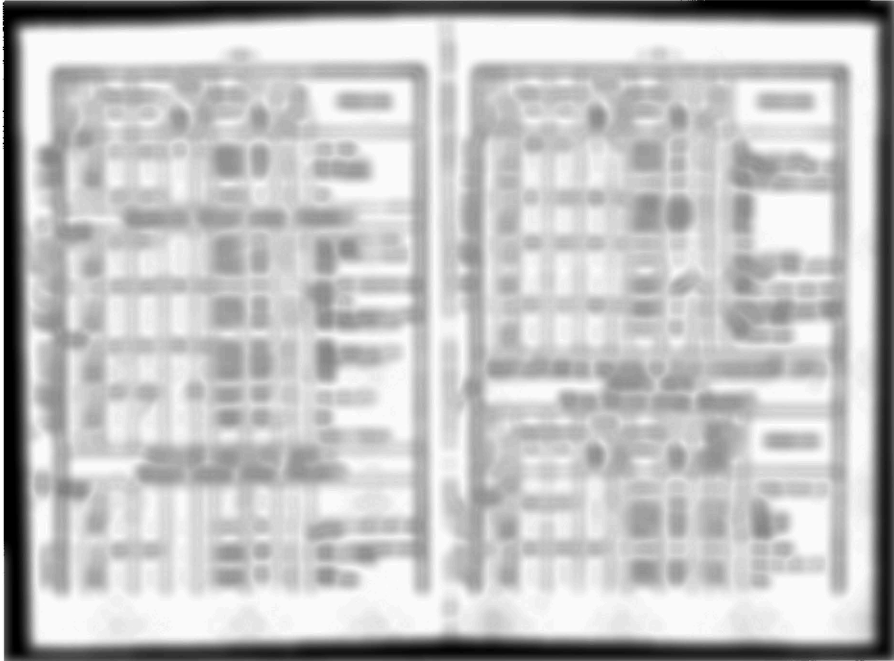
画像09
「観測地」



画像10 a
「1874年」



画像10 b
「沿海地における観測地」



画像11 a

「太平洋1875年 シナ海・対馬海峡1876年」



画像11 b

「日本海 1876年」

本研究集会は、科学研究費補助金基盤研究A「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」(課題番号15202014)、研究代表者・保谷 徹)の一環として、その経費の一部も使用して行なった。